

造幣博物館のご案内

MINT MUSEUM



（注）本資料における年月の表記は、1872（明治5）年以前については旧暦によっています。

目 次 —Contents—

■ 展示施設のご案内

造幣博物館のあらまし.....	4
1F エントランスホール.....	5
2F 展示室（１）.....	6
2F 展示室（２）.....	7
3F 展示室（１）.....	8
3F 展示室（２）.....	9
3F 多目的ホール・屋外展示.....	10

■ 展示のご紹介 ～近代造幣局の誕生～

近代造幣局の誕生.....	12
造幣局の所在地.....	13
造幣局創業式.....	14
加納夏雄.....	15
大野規周.....	16
久世喜弘.....	17
お雇い外国人.....	18
硫酸ソーダその他工業製品製造設備の模型.....	19
機械類など.....	20
わが国最古の西洋式ガス燈.....	21
創業当時の圧印機.....	22
マンチニの絵・創業当時の錦絵.....	23
和英語林集成・附音挿図英和字彙・洋式帳簿.....	24

■展示のご紹介 ～貨幣の歴史～

中国の古銭	2 6
円銭・半両銭・馬蹄銀	2 7
富本銭	2 8
和同開珎	2 9
皇朝十二銭	3 0
渡来銭・模造銭	3 1
古丁銀と地方銀	3 2
甲州金	3 3
竹流金・菊桐金錠	3 4
天正菱大判	3 5
天正長大判	3 6
慶長大判	3 7
元禄大判・享保大判	3 8
天保大判・万延大判	3 9
天保五両判（試鑄貨）	4 0
小判・一分金①	4 1
小判・一分金②	4 2
小判など	4 3
小判座模型	4 4
丁銀・豆板銀	4 5
寛永通宝など	4 6
江戸時代の地方貨	4 7
貨幣司、江戸時代の財布・天秤など	4 8
新貨条例①	4 9
新貨条例②	5 0
古金銀預り証券	5 1
「貨幣法」制定	5 2
金本位制最後の金貨幣	5 3
「臨時通貨法」制定	5 4
幻の貨幣（未発行貨幣）	5 5
記念貨幣①	5 6
記念貨幣②	5 7
記念貨幣③	5 8
造幣局が製造した外国貨幣	5 9

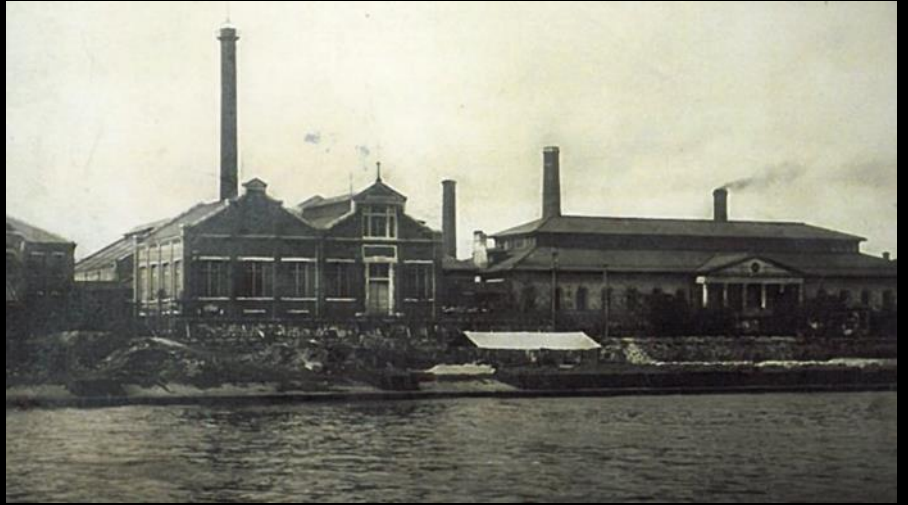
展示施設のご案内



造幣局創業功労者の肖像レリーフ

造幣博物館のあらまし

現在造幣博物館となっている建物は、造幣局創業当時の動力源であった蒸気を効率の良い電気に切り替えるために1911（明治44）年に火力発電所として建てられたものです。



火力発電所として建てられた造幣博物館の建物（写真左）



開館当時の造幣博物館外観

このレンガ造りの西洋風建物は、火力発電所としての役割を終えた後も変電施設などに使用されていましたが、1967（昭和42）年に新たな変電施設が建てられると、造幣局構内に残る唯一の明治時代の建物を保存する声上がり、博物館として新たな道を歩むことになりました。

そして、造幣局が収集・保管してきた貨幣や創業当時の品々などの貴重な資料を一般公開し、造幣事業を紹介する「造幣博物館」が、1969（昭和44）年4月に開館しました。

2008（平成20）年から『人に優しい博物館、環境に配慮した博物館、魅せる博物館』を目指し、展示や設備に最新の手法を導入し、皆様方により親しんでいただけるよう大改装を行い、2009（平成21）年4月28日にリニューアルオープンしました。



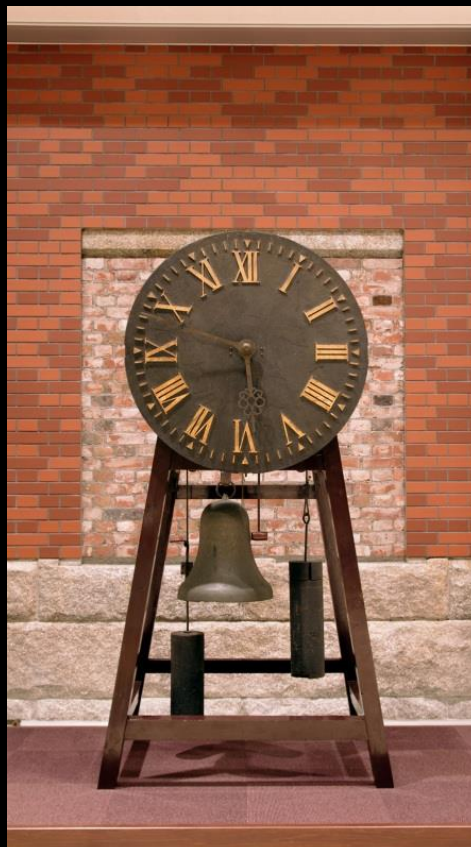
現在の造幣博物館外観

1 F エントランスホール

来館者を出迎えるエントランスホールは開放的な吹き抜け空間となっており、創業当時の造幣局全景模型や1876（明治9）年に造幣局工作方技師 大野規周が製作した大時計を展示しています。



創業当時（明治6年12月）の
造幣局全景模型

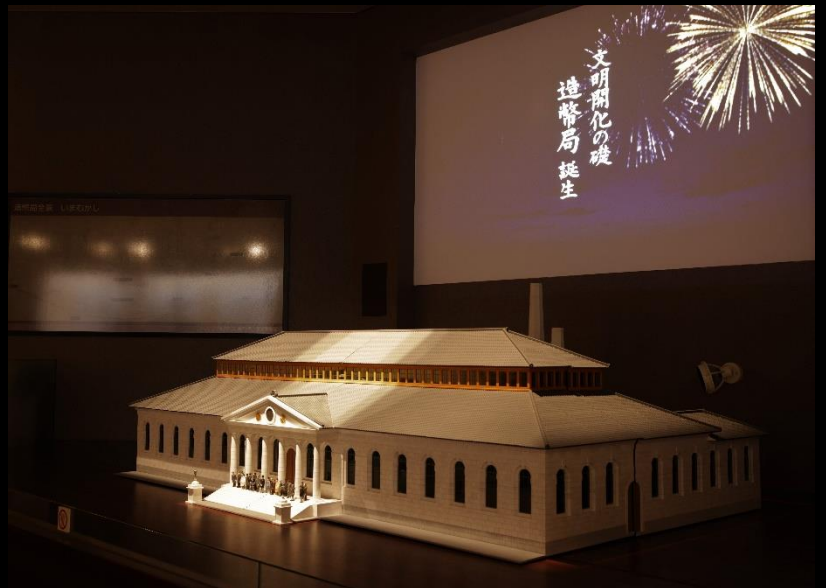


大時計

大時計後方のレンガは、1911（明治44）年の建物竣工当時の外壁をそのままの状態に保存しているものです。

2F 展示室（1）

造幣局誕生の歴史を、映像と模型を組み合わせで紹介するシアターを設置しています。また、創業当時の貴重な資料や、技術指導に尽力した「お雇い外国人」及び高度な技量を発揮した日本人技術者の軌跡を紹介しています。



映像と模型を組み合わせたシアター

2F 展示室（2）

貨幣の製造工程、勲章、日本で開催されたオリンピック・パラリンピックの入賞メダル、国民栄誉賞盾などを展示しています。また、体験コーナーでは、貨幣袋・千両箱の重量体験コーナー、本物の金塊・銀塊や古銭に触れることができるコーナー、記念撮影スポットなどがあります。



3 F 展示室（1）

富本銭、和同開珎から江戸時代の大判・小判、造幣局が製造した明治以降の貨幣などを展示しています。立体型展示ケースを使い、LEDによる近接照明を実現し、貨幣の魅力を堪能していただけるギャラリー空間となっています。



3 F 展示室（2）

わが国の記念貨幣、貨幣セット及び造幣局が製造した外国貨幣を展示しています。また、海外から集めたユニークな貨幣などを展示しています。



3 F 多目的ホール

特別展の開催やイベントの実施などを行っています。



屋外展示



博物館建物の横に、創業当時に使用していた圧印機を展示しています。

左側：フランス製 トネリエ圧印機

右側：ドイツ製 ウールホルン圧印機



造幣博物館の旧入口

「造幣博物館」の文字は福田赳夫大蔵大臣（当時）が揮毫したものです。

展示のご紹介

～近代造幣局の誕生～



旧 正 門 と 詰 所

近代造幣局の誕生



蒸気機関時代と現在の造幣局

明治新政府は、混乱した貨幣制度の立て直しを急務とし、洋式設備による造幣工場を建設することを決定しました。

その建設地は、1868（慶応4）年8月に、現在の本局がある大川（旧淀川）右岸の旧幕府御破損奉行役所（大阪城内外の建築物の造営、維持管理を行っていた役所）の材木置場跡をはじめとする一帯が選ばれ、1868（明治元）年11月（慶応4年9月に明治と改元）、敷地約18万㎡（5万6千坪）の広大な土地で工場建設が開始されました。

この地が選ばれたのは「第一に水利を考え、広大な面積をとるべし」との理由からですが、なぜ大阪に設置されたかという理由は

- ① 王政復古の大事業に貢献した大阪財界に対する配慮
- ② 大阪遷都論があったこと
- ③ 当時、江戸の治安が悪かったこと
- ④ 大阪が天下の台所で経済の中心であったこと

などがあげられますが、どれという決定的な理由は不明です。

総工費96万両を費やした世紀の大工事は多難を極めました。1870（明治3）年8月に近代的な造幣工場がほぼ完成しました。1871（明治4）年2月15日に創業式を挙行し、当時としては画期的な洋式設備による貨幣の製造を開始しました。

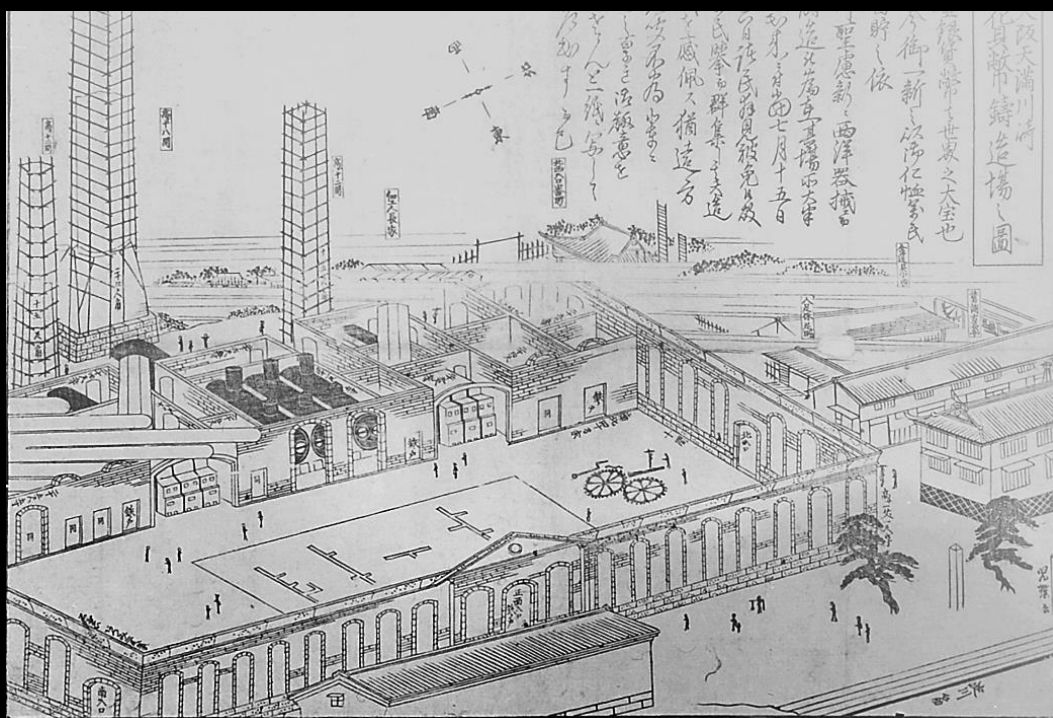
造幣局の所在地

造幣局の対岸地域一帯は、昔から桜の宮と呼ばれ、春は桜、夏は夕涼み、秋は名月など四季折々の賑わいを見せる景勝の地でした。一方、造幣局の周辺は、江戸時代には町奉行の与力（大塩平八郎など）や同心が居住していたところで、また、川崎東照宮（現在の大阪市立滝川小学校）が建立されていた土地でもありました。



1863（文久3）年
大阪地図

建設中の貨幣鑄造場版画

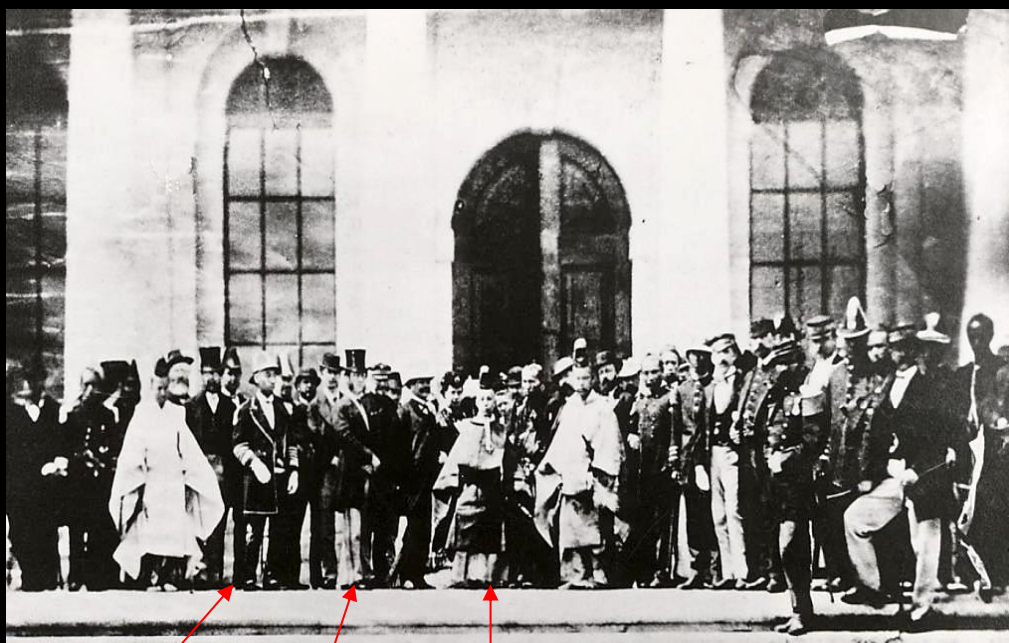


造幣局創業式

明治新政府は、徳川幕府時代の混乱した貨幣制度の立て直しを急ぎ、品位・規格の均一な新貨幣を発行するため、当時世界最大規模の造幣局の建設に全力を注ぎ、大川（旧淀川）端の近代洋式工場において創業しました。

大型機械などは輸入しましたが、必要な機材・資材の多くを自給自足で賄い、明治初期における近代工業の先駆けとなりました。

「創業式」記念写真



造幣頭
馬渡俊邁

イギリス公使
ハリー・パークス

右大臣
三条実美

1871（明治4）年2月15日（新暦4月4日）、金銀貨幣鑄造場玄関前で撮影されたもので、右大臣三条実美、イギリス公使パークスら外国人の姿も見えます。

造幣局では、文明開化の先駆者として洋服着用・断髪及び廃刀などを率先して導入しましたが、丁髷や刀を差している職員も写っている大変貴重な写真です。

加納 夏雄

かのう なつお

1828（文政11）年～1898（明治31）年

明治天皇の太刀の金具を彫刻したことがあった加納夏雄は、1869（明治2）年7月、新政府に新貨幣の見本の製作を命じられ、その図案作成及び金属彫刻に従事しました。その優秀な技術は、お雇い外国人技術者を感嘆させるものでした。

なお、明治期の貨幣の図案と彫刻は、加納夏雄とその門下生（益田友雄など）の手によるものです。



新貨幣の図案

明治中期までの貨幣のほとんどは、表面に龍が描かれています。これは、外国では元首の肖像を貨幣に使用することが一般的ですが、わが国では天皇の肖像では“畏れ多い”ということから、代わりに元首の象徴である龍を用いたものです。



手本銀板（一円銀）

龍の手本として、1円銀貨大の銀円板に加納夏雄が直接彫刻したものです。

大野 規周

おおの のりちか

1820（文政3）年～1886（明治19）年

幕府天文台の測量器を作る家に生まれ、1862（文久2）年から6年間、オランダに留学し、精密機械の製作技術を習得しました。

1869（明治2）年に造幣局に入り、天秤をはじめ大時計や計数機などを製作し、その優秀な技術は、造幣首長であったキンドルも激賞したといわれています。



大時計

1876（明治9）年に製作したものです。当時の金銀貨幣鑄造場の正面に取り付けられ、局内に時刻を知らせていました。



天秤

1876（明治9）年に製作したもので、金貨など製造貨幣の重さを量るために使用されていました。



手まわし計数器

1870（明治3）年に製作したもので、一回転で貨幣24枚を計数することができ、金・銀・銅貨幣の計数に使用されていました。

久世 喜弘 くぜ よしひろ

1826（文政9）年～1882（明治15）年

大垣藩の家臣で、化学・写真術・火薬などに詳しく、1868（慶応4）年に新政府の命を受け、京都の金座で外国貨幣やわが国の金・銀貨幣などの分析・研究を行いました。

その結果、わが国の貨幣は品位、量目が乱雑不統一で、規格の統一された欧米各国の貨幣とは比べ物にならないことがわかり、近代的造幣工場の建設が決まるとその実現に尽力する一方、1869（明治2）年、参議大隈重信とともに貨幣の形状は「円形」に統一し、十進法を採用するよう建議し、新貨幣制度に大きな貢献を果たしました。

造幣局では、初代精製分析所長に就任し、1878（明治11）年に退官しました。



木彫りの龍（花火筒の装飾）

創業式当日、新式着色花火が1日中打ち上げられました。この龍は、その時使用された花火筒の飾りであり、久世喜弘が製作したものです。

久世喜弘が愛用した試金煙管

銀製のもので、金位999から700まで七つの金合金の星がはめ込まれ、横に「以併権試金位」（あわせもって金位を権試す）と彫り込んであります。金製品を簡易に鑑定する道具として久世喜弘が愛用していました。



お雇い外国人

創業当時、貨幣製造に必要な大型機械や製造設備の技術指導に延べ31人の外国人技術者（お雇い外国人）を雇い入れ、その指導のもと、日本人職員は先進技術を吸収しました。

お雇い外国人名簿

大造幣局御雇外国人人名表

職名	姓名	国籍	採用年	退職年	備考
造幣局長	W. ガウランド	イギリス人	1869 (明治2) 年	1875 (明治8) 年	採用
造幣局長	T.W. キンドル	イギリス人	1869 (明治2) 年	1875 (明治8) 年	採用
造幣局長	V.E. ブラガ	ポルトガル人	1870 (明治3) 年	1875 (明治8) 年	採用
造幣局長	...	...	...	...	...



W. ガウランド



T.W. キンドル



V.E. ブラガ

化学兼冶金師、試験分析方
イギリス人
1872 (明治5) 年 採用
1888 (明治21) 年 退職

日本人職員からの人望が厚く、16年にわたり造幣局に勤務した一方、余暇には古墳の研究や地質調査を行い、また、「日本アルプス」の命名者として名を残す登山家でもありました。

造幣首長
イギリス人
1869 (明治2) 年 採用
1875 (明治8) 年 退職

元香港造幣局長で、造幣局の建設、諸機械の設置及び作業の監督、指導にあたり、その功績は大きなものでした。しかし、傲慢な態度、性格が災いし、日本人職員と絶えず紛争を起こした結果、本人に対する排斥運動にまで発展しました。

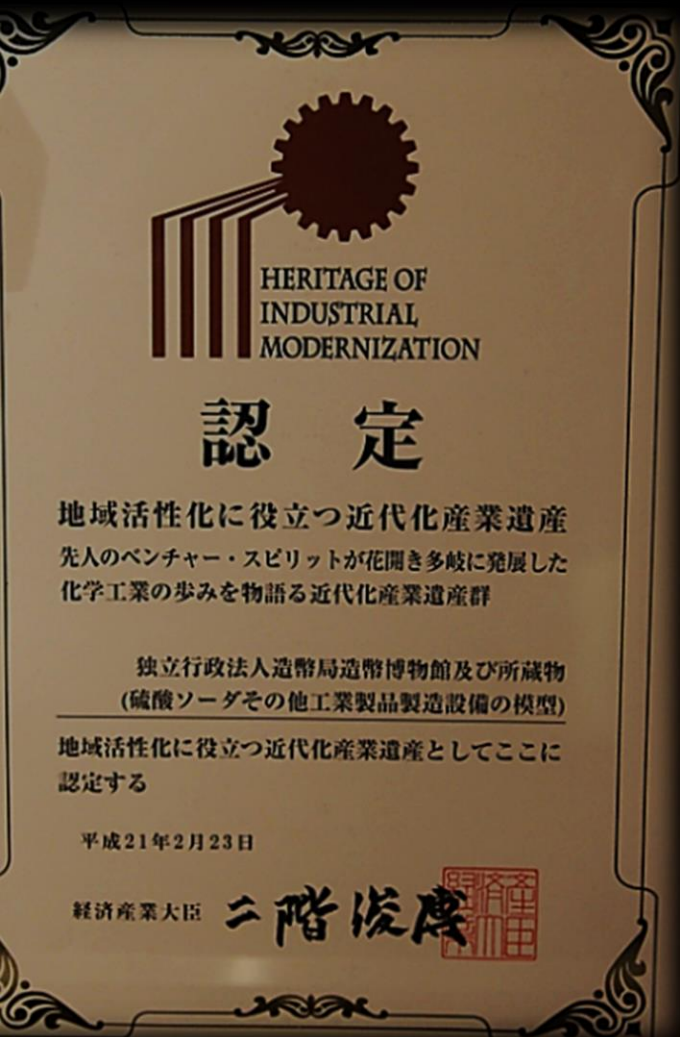
地金局計算方
ポルトガル人
1870 (明治3) 年 採用
1875 (明治8) 年 退職

わが国初の複式簿記の指導にあたりました。また、造幣局退職後は大蔵省（現在の財務省）に転じ、官庁簿記制度を立案しました。

硫酸ソーダその他工業製品製造設備の模型

造幣局は、1881（明治14）年にわが国初のソーダ製造所を開設し、炭酸ソーダ、硫酸ソーダ、苛性ソーダ等の化学薬品を製造しました。この模型は、当時化学の大家と仰がれた宇都宮三郎の設計・監督により工部省で製作されたものです。当時は、図面により設備を作る技術が発達していなかったため、まずこのような縮尺10分の1の模型を作り、これを基にして設備が建設されました。

ガラスの原料となる炭酸ソーダを造幣局が製造したことは、大阪・天満地域における近代ガラス工業発展の礎石となったとも言われています。



硫酸ソーダ製造設備の模型



粗製ソーダ製造設備の模型

これらの模型一式は、経済産業大臣から「近代化産業遺産」に認定されています。また、公益社団法人日本化学会から「化学技術者の先駆け 宇都宮三郎資料」の一つとして「化学遺産」に認定されています。

機 械 類 など



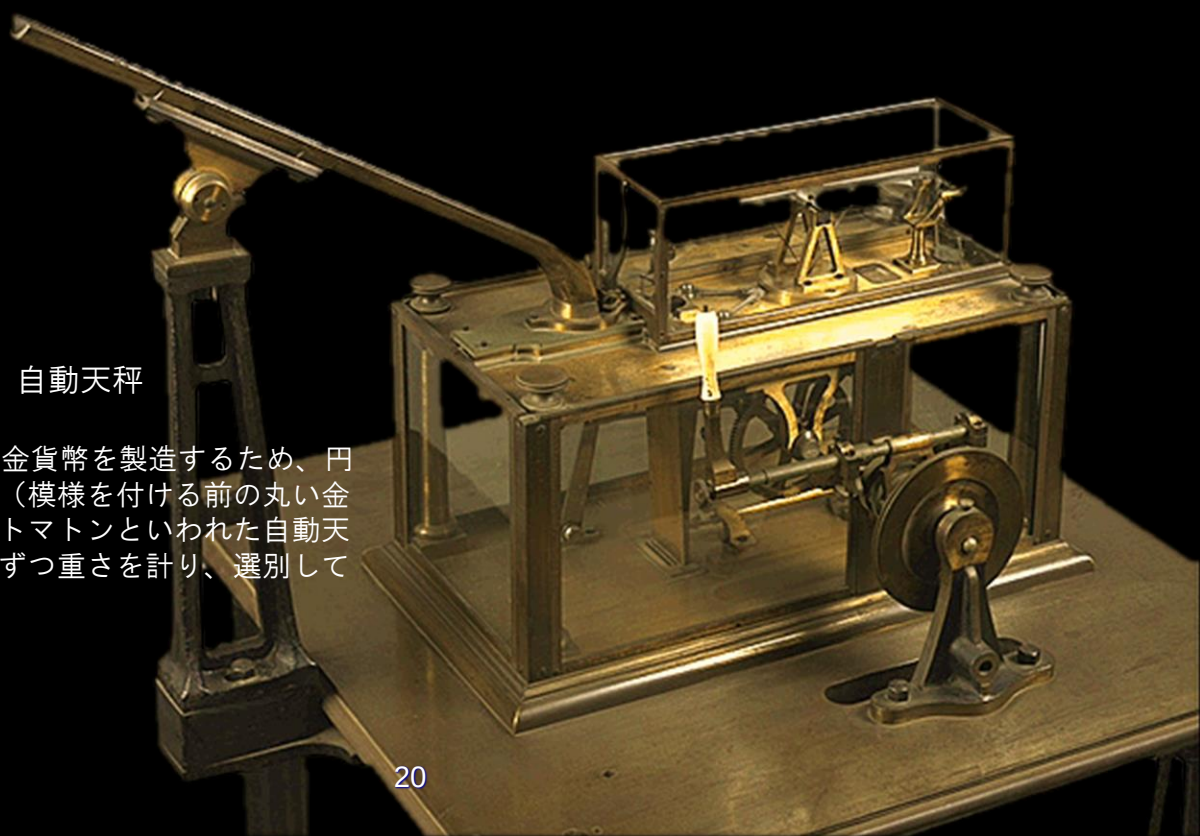
イギリス製試金天秤

明治初期に試金分析に使用されたもので、創業当時はこのような天秤などの精密機械が多く輸入されました。



硫酸銅

創業当時、硫酸銀から銀を還元する過程において産出した巨大な硫酸銅の塊で、非常に珍しいものです。



自動天秤

正しい量目の金貨幣を製造するため、円形（えんぎょう（模様を付ける前の丸い金属板））をオートマトンといわれた自動天秤にかけて1枚ずつ重さを計り、選別していました。

わが国最古の西洋式ガス燈



造幣局構内にあるガス燈

1871（明治4）年創業当時、構内や付近の街路に建てられた65基あった屋外照明用のガス燈の一つで、その明るさは当時、ろうそくや行灯の灯りしか知らなかった大阪の人々を驚かせました。このほか工場や宿舎用の室内照明用として621基が設置されていました（計686基）。

創業当時の圧印機



トネリエ圧印機（フランス）

1871（明治4）年の創業当時に使われていた、フランス製の圧印機です。閉鎖状態にあったイギリス設立の香港造幣局から1868（慶応4）年に購入した機械一式の一つです。

当初は金貨幣及び銀貨幣の製造に用いられ、後に銅貨幣の製造に転用されたとの記録が残っています。



ウールホルン圧印機（ドイツ）

創業間もない1872（明治5）年以降、合計10台が導入されたドイツ製の圧印機の一つです。

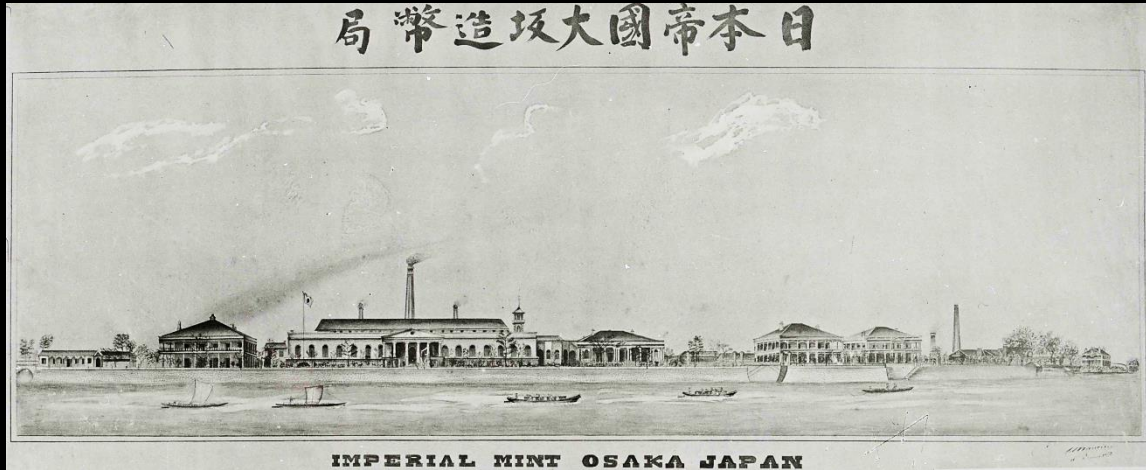
当時、金貨幣及び銀貨幣の製造に使われていたとされています。



これらの圧印機は、世界的に見ても保存されているものは数台しかなく、また、日本の貨幣制度の整備に貢献した歴史的価値ある機械であることが評価され、2021（令和3）年8月、一般社団法人日本機械学会より「機械遺産」に認定されています。

マンチニの絵・創業当時の錦絵

マンチニの絵（造幣局全景図）



この絵は1873（明治6）年にイタリア人のマンチニが描いたものです。金銀貨幣鑄造場や洋人館、泉布観など、対岸から見た当時の造幣局の建物が詳細に描かれています。

マンチニは造幣局で働くお雇い外国人の一人で、1870（明治3）年3月から1877（明治10）年3月まで、造幣局内の伸金局に勤務していました。

創業当時の錦絵



浮世絵師の初代長谷川小信による錦絵です。陸上にはレンガ造りの西洋風の建物が並び、水上には蒸気船が浮かぶ光景が描かれています。創業当時の造幣局は大阪における文明開化の象徴的存在でした。

和英語林集成・附音挿図英和字彙・洋式帳簿

●和英語林集成

(和英辞典)

アメリカ人宣教師・医師のヘボンによって編纂され、1867（慶応3）年に発行された、「日本最初の和英辞典」です。

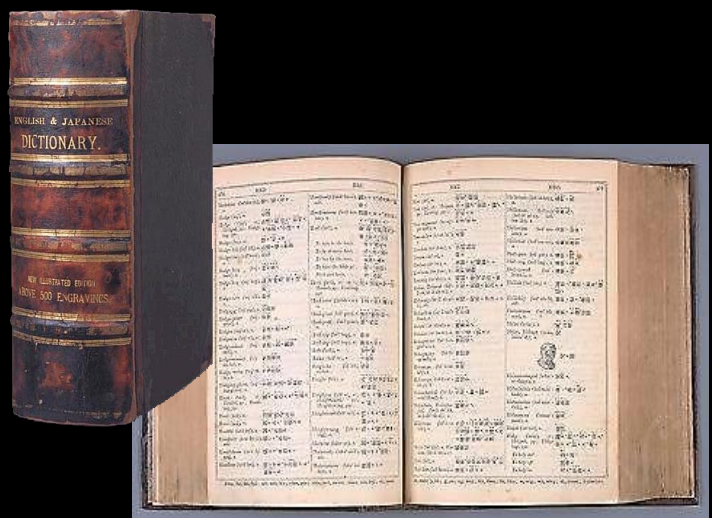
わが国にはまだ活字印刷技術がなかったので、当時上海にあったアメリカの教会の印刷所で15,000部が印刷されましたが、現存数が少ない貴重なものです。



●附音挿図英和字彙

(英和辞典)

1873（明治6）年1月、西洋式活版印刷により国内で最初に印刷された大型辞書（5万5千語収録）で、なかには500余の鮮明なわが国最初の木口木版挿絵が入っています。現存数も少なく、わが国における英語辞典を語るうえでは欠くことのできない貴重なものです。



●洋式帳簿

創業当時使用されていたもので、使用しない時には鍵をかけて保管するようになっており、当時の管理の様子が窺える貴重な帳簿です。



展示のご紹介

～貨幣の歴史～



大時計

中国の古銭



貝 貨



魚 幣



布 幣



刀 幣

中国で貨幣が最初に使われたのは、今から約3,500年前のことで、「貝」のお金です。

その後、古代農具の鋤をかたどった「布幣（布銭・布貨）」や刀の形に模した「刀幣（刀銭・刀貨）」などが造られました。

円銭・半両銭・馬蹄銀

円 銭

布幣・刀幣に続いて戦国時代（西暦前403年～221年）に円形有孔の貨幣である「円銭（環銭）」が出現しました。

円銭は、はじめ玉環あるいは紡車を模して造られたといわれ、鑄造地により重さ、厚さ、大きさが異なっています。



半両銭

西暦前221年に中国を統一した秦の始皇帝は、初めて円形方孔（丸い形に四角の穴）で、額面を表示した貨幣「半両銭」を造りました。



馬蹄銀

中国の元時代末期（1300年頃。わが国では鎌倉時代末期から室町時代初期）から出現しました。

馬蹄状の銀塊で、大きな取引や貯蓄用に造られた地金重量通貨の一種です。



富本錢

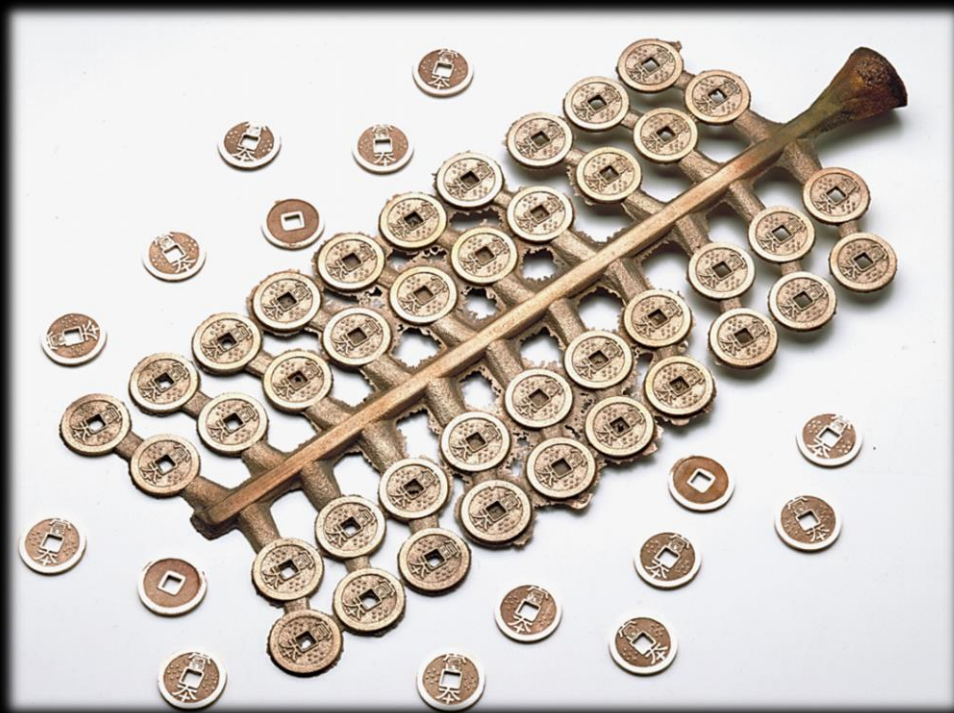


(奈良文化財研究所所蔵・複製)

「富本錢」は、708（和銅元）年の和同開珎発行に遡ること25年前の683（天武12）年に鑄造されました。

富本錢は孔の上下に「富」と「本」の文字がありますが、「富本」とは「国を富まし、国民を富ませる本」という意味で、貨幣そのもののことです。また、孔の左右に7つの点がありますが、これは中国の陰陽五行思想の陽（日）と陰（月）と木・火・土・金・水の七曜を表し、天地の調和を示したものとされています。

富本錢枝錢



(奈良文化財研究所所蔵・複製)

和同開珎



銀 錢



銅 錢
古和同



銅 錢
新和同

708（慶雲5）年1月、武蔵国秩父郡（現在の埼玉県秩父市）から多量の自然銅が産出し、その銅が朝廷に献上されたことにより、年号を「和銅」と改元しました。

朝廷は「催鑄銭司」を置いて鑄銭事業を推し進め、708（和銅元）年5月に銀錢を、8月に銅錢を発行しました。

和同開珎は、鑄造の精度や材質、書体の違いから、「古和同」と「新和同」に大別されます。



和同開珎錢範

和同開珎の鑄造に使用された錢範（せんぱん）といわれる素焼きの鑄型です。

皇 朝 十 二 銭

708年（和銅元）年に鑄造された「和同開珎」を皮切りに、250年の間に相次いで12種類の貨幣が鑄造され、それらを総称して「皇朝十二銭」と呼んでいます。



和同開珎



万年通宝



神功開宝



隆平永宝



富寿神宝



承和昌宝



長年大宝



饒益神宝



貞観永宝



寛平大宝



延喜通宝



乾元大宝

貨種名	始鑄年	材質	量目 (g)	直径 (mm)	銅分 (%)
和同開珎	708 (和 銅 元) 年	銀・銅	3.75	24.0~24.3	82.95
万年通宝	760 (天平宝字 4) 年	銅	3.75	25.5~25.8	77.98
神功開宝	765 (天平神護 元) 年	〃	3.75	22.5~25.5	75.17
隆平永宝	796 (延 暦 15) 年	〃	3.0	24.3~26.1	69.50
富寿神宝	818 (弘 仁 9) 年	〃	2.96	22.8~23.4	76.67
承和昌宝	835 (承 和 2) 年	〃	2.93	18.9~22.5	70.50
長年大宝	848 (嘉 祥 元) 年	〃	2.63	16.5~21.0	71.50
饒益神宝	859 (貞 観 元) 年	〃	2.55	17.4~21.0	63.00
貞観永宝	870 (貞 観 12) 年	〃	2.33	17.4~19.8	52.84
寛平大宝	890 (寛 平 2) 年	〃	2.25	18.9~19.5	80.00
延喜通宝	907 (延 喜 7) 年	〃	2.59	18.9~19.5	69.48
乾元大宝	958 (天 徳 2) 年	〃	2.44	19.5	51.25

渡来銭・模造銭

渡来銭

平安時代中期以降室町・戦国時代にかけては、各地で商業が活発になってきましたが、鎌倉幕府や室町幕府は貨幣の鑄造を行わなかったため、この時代わが国で流通した貨幣は中国（宋・元・明）の貨幣が主流でした。

その貨幣の中で明の「永楽通宝」は大量に輸入され、形や品質が一定していたので信頼性が高く、国内の基準貨幣として重視されました。



貞元重宝



天漢元宝



宋元通宝



皇宋通宝



景定元宝



至正通宝



大中通宝



永楽通宝



洪武通宝

模造銭

室町時代中期以降、海外で造られた渡来銭をわが国で模造することが盛んとなりました。この模造銭（模鑄銭）は、元の銭貨と比べて材質的にも製造技術のうえでも劣るものでした。

「島銭」、「加治木銭」、「加治木系ビタ銭」などと呼ばれるものが有名です。



和開通宝
(島銭)



洪武通宝
(加治木銭)



元符通宝
(加治木系ビタ銭)

古丁銀と地方銀

「古丁銀」は、室町時代末期から各地で鑄造された、重さが不定でなまこ形をした銀錠（塊）の総称で、世界遺産・石見銀山などの産出銀で造られました。切遣いの貨幣として使用され、のちに、徳川幕府により発行された丁銀の先駆けをなしたものです。

「地方銀」は、古丁銀と同様、切遣い専用の貨幣として室町時代末期から江戸時代初期にかけて鑄造されたもので、日本海沿岸の商業活動が盛んな地域において商業決済に使用されました。

「切遣い」とは、切断・秤量のうえで使用することです。切遣いの貨幣には、どこを切っても極印が残るよう全面に極印が打たれたものがあります。

●古丁銀



石州御公用切銀



山口天又切銀



石州灰吹切銀

●地方銀



加賀花降銀



越後宝字切銀



雲州木瓜判切銀



羽州角館切銀

甲 州 金



甲州一両金



甲州一分金



甲州二朱金



甲州一朱金



甲定一分金（表）



甲定一分金（裏）



甲定二朱金（表）



甲定二朱金（裏）



甲重一分金（表）



甲重一分金（裏）

1567（永禄10）年、武田信玄は今川氏の領していた富士・安倍金山（いずれも現在の静岡県）を手に入れたのを機に、量目を表示した金貨幣「甲州金」を造りました。

甲州金の量目単位は、両（4匁・15g）・分（1/4両）・朱（1/4分）・朱中（1/2朱）・糸目（1/2朱中）・小糸目（1/2糸目）・小糸目中（1/2小糸目）となっていました。

両・分・朱は、「重量単位」であって、のちに徳川家康が制定した慶長の貨幣制度に受け継がれていきました。

武田氏が滅び、甲州が家康の領地となり、甲州金は家康に引き継がれ、幕府公認の地方貨として甲斐（現在の山梨県）一国通用と限定しながらも文政期（1818年～1829年）まで鑄造されました。

竹流金・菊桐金錠

造幣局のみが所蔵する希少品

「竹流金」と「菊桐金錠」は1935（昭和10）年に造幣局の横を流れる大川（旧淀川）から発見されました。1615（慶長20）年の大坂城落城の際の遺物と考えられており、300年以上にわたり川底に沈んでいたことになります。造幣局のみが所蔵する大変貴重なものです。



竹流金

安土桃山時代 1580年代
量目：98.6 g
品位：金730／1000

竹のような形の鋳型に流し込んで造ったような節が見られるところからこのように呼ばれています。

表面の菊と桐の紋様は「菊桐金錠」と同じもので、鉄砲などの武器の購入や浪人を雇うときなどに必要な量を切って使用したと考えられています。



菊桐金錠

安土桃山時代 1580年代
量目：164.0 g
品位：金730／1000

なまこ形の棹金で、菊と桐の紋が打刻されることからこのように呼ばれています。

「金錠」は地金としてではなく、貨幣としての目的から造られた金のことをいいます。

菊紋などの極印のないものは未完成品といわれ、のちの大判はこれをたたき延ばして造られたといわれています。

天正菱大判

現存数わずか5～6枚の希少品



安土桃山時代 1591（天正19）年
量目：166.6g
品位：金740／1000

豊臣秀吉が足利将軍家お抱えの彫金師後藤家に命じて造らせた大判で、菱形の枠内に桐紋の極印を打ち、量目（拾両）、製造責任者の署名と花押、製造年（天正十九）が墨書きされています。この菱形の極印から「菱大判」と呼ばれ、現存数はわずか5～6枚といわれている希少品です。

天正長大判



安土桃山時代 1589（天正17）年
量目：163.7g
品位：金730／1000

1589（天正17）年に豊臣秀吉が京都の聚楽第で宮家、公家、大名たちを招いて催した「太閤の金賦り」の際に与えた金子がこの長大判といわれており、長さ17.5cm、幅10.2cmもある世界最大級の金貨です。

慶長大判

徳川幕府幣制の始まり

天下を統一した徳川家康は、わが国で初めて貨幣制度を統一し、貨幣単位を定めて、諸国統一の基本となる新しい貨幣を鑄造させました（慶長の幣制）。

1601（慶長6）年、「金座」と「銀座」を設置して慶長金・銀貨を鑄造し、また、1636（寛永13）年に「銭座」を設け、銅貨の寛永通宝を鑄造しました。金・銀・銅貨の三貨制と1両＝4分＝4千文とする四進法を採用し、金貨（小判、一分金など）と銅貨（寛永通宝など）は計数貨幣、銀貨（丁銀、豆板銀）は秤量貨幣（のちに計数貨幣として、一分銀などの銀貨を発行）として全国に流通させました。



慶長笹書大判

1601（慶長6）年
量目：165.0 g
品位：金672/1000

慶長大判のうち、後藤家5代目・後藤徳乗の弟長乗が墨書したものを笹書大判といいます。花押が笹の葉のように見えることからこのように呼ばれます。



慶長大判

1601（慶長6）年
量目：164.0 g
品位：金671/1000

関ヶ原の合戦に勝利した徳川家康が、彫金師の後藤家に作らせた大判です。豊臣秀吉の時代の天正大判の形状を受け継いでおり、恩賞や贈答など、儀礼の場面で使用されました。

「拾両 後藤（花押）」という墨書がありますが、この「拾両」は44匁（約165グラム）という重さを表しています。

元禄大判・享保大判



元禄大判（表）

元禄大判（裏）

1695（元禄8）年
量目：165.0 g
品位：金521／1000

5代将军徳川綱吉は、通貨供給量を増やし、発行益を得るねらいから改鑄を行い、金貨と銀貨に含まれる金銀の割合を減らしました（元禄金銀）。

元禄大判は江戸時代の大判の中で最も発行枚数が多いといわれていますが、後の改鑄の際に品質の良い新貨と交換され鑄つぶされたため、現在まで残っているものは多くありません。裏面に元禄を示す「元」という極印が打たれているのが特徴です。

享保大判

1725（享保10）年
量目：165.4 g
品位：金676／1000



7代将军徳川家継のもと経済政策を主導した新井白石は、通貨供給量を減らすことで物価を下げるねらいから改鑄を行い、金貨と銀貨に含まれる金銀の割合を増やしました（正徳金銀）。その政策を継承した8代将军徳川吉宗が発行したのが享保大判です。

江戸時代を通して大判の製造は後藤四郎兵衛家が請け負いました。享保大判には12代から17代までの当主が墨書したものがあります。

天保大判・万延大判



天保大判

1838 (天保9) 年
量目：165.4 g
品位：金674/1000

享保大判の規格を踏襲しており、天保吹増大判又は吹増大判ともいわれます。表面の桐紋極印の細部がわずかに享保大判と異なります。

万延大判

1860 (万延元) 年
量目：112.8 g
品位：金363/1000



幕末、海外との貿易が本格化すると、大量の金貨が海外に流出しました。これを防ぐため幕府は改鑄を行い、金貨に含まれる金の量を大幅に減らしました。

これまで大判の量目（重さ）は44匁（約165グラム）でしたが、万延大判は30匁（約112グラム）と大幅に引き下げられています。また金の含有量もこれまでの大判の半分以上です。たがね打ちのものと、のし目打ちのものの2種類があることが特徴です。

天保五両判（試鑄貨）

造幣局のみが所蔵する希少品

五両判は、天保の幣制改革で新たに定められた金貨であり、大判と小判の中間的なものとして「中判」とも俗称されていますが、以後再び発行されることはなく、江戸期を通じて唯一無二の貨種となりました。



1837（天保8）年頃
量目：34.2 g
品位：不明

造幣局が所蔵する試鑄貨は、天保五両判の形式が決まるまでに金座で試作されたものです。実際に流通した正式判と見比べると、裏面の年代印が正式の「保」印ではなく「天」の字の極印が打たれていること、表・裏の各極印がやや小さいことなどの違いが見られます。

小判・一分金 ①

江戸期を通じて、1両の価値を持つ「小判」とその4分の1の価値を持つ「一分金」が発行されました。



慶長小判

1601（慶長6）年
量目：17.8 g
品位：金863／1000



一分金

1601（慶長6）年
4.4 g
金857／1000



元禄小判

1695（元禄8）年
量目：17.8 g
品位：金564／1000



一分金

1695（元禄8）年
4.4 g
金564／1000



宝永小判

1710（宝永7）年
量目：9.4 g
品位：金834／1000



一分金

1710（宝永7）年
2.3 g
金834／1000



正徳小判

1714（正徳4）年
量目：17.8 g
品位：金857／1000



一分金

1714（正徳4）年
4.4 g
金857／1000

小判・一分金 ②



享保小判

1715 (正徳5) 年
量目: 17.8 g
品位: 金861/1000



一分金

1715 (正徳5) 年
量目: 4.4 g
品位: 金861/1000



元文小判 (真文小判)

1736 (元文元) 年
量目: 13.1 g
品位: 金653/1000



一分金

1736 (元文元) 年
量目: 3.2 g
品位: 金653/1000



文政小判

1819 (文政2) 年
量目: 13.1 g
品位: 金561/1000



一分金

1819 (文政2) 年
量目: 3.2 g
品位: 金560/1000



天保小判

1837 (天保8) 年
量目: 11.3 g
品位: 金568/1000



一分金

1837 (天保8) 年
量目: 2.8 g
品位: 金568/1000

小判など



安政小判

1859（安政6）年
量目：9.0 g
品位：金555／1000



一分金

1859（安政6）年
量目：2.2 g
品位：金570／1000



万延小判（雛小判）

1860（万延元）年
量目：3.3 g
品位：金573／1000



一分金

1860（万延元）年
量目：0.8 g
品位：金574／1000



明和五匁銀

1765（明和2）年
量目：18.7 g
品位：銀460／1000



天保一分銀

1837（天保8）年
量目：8.6 g
品位：銀991／1000



国内で三分として通
用させるため、「改三
分定」と打刻されたも
のです。



メキシコドル

1857（安政4）年
量目：26.8 g～27 g
品位：銀862～886／1000

秤量貨幣であった銀貨の計数貨幣化を図って発行された
ものです。

小判座模型

この模型は、造幣局が所蔵している金座絵巻の中から、文政小判金を製造している工程の一部を再現したものです。



丁銀・豆板銀

— 主なもの —



慶長丁銀

量目：不定
品位：銀800
／1000



慶長豆板銀



元禄丁銀

量目：不定
品位：銀640
／1000



元禄豆板銀



享保丁銀

量目：不定
品位：銀800
／1000



享保豆板銀



天保丁銀

量目：不定
品位：銀261
／1000



天保豆板銀



安政丁銀

量目：不定
品位：銀135
／1000



安政豆板銀

寛永通宝など

一文銭



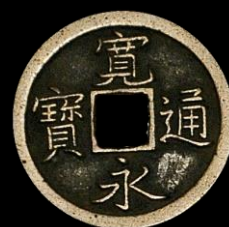
1636 (寛永13) 年
(近江・坂本)



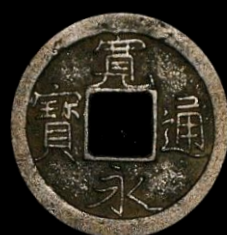
1636 (寛永13) 年
(江戸・芝)



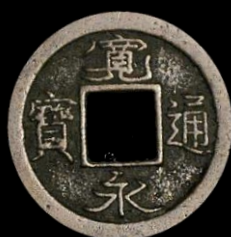
1656 (明暦2) 年
(駿河・沓谷)



1668 (寛文8) 年
(江戸・亀戸)



1700 (元禄13) 年
(京・七条)



1735 (享保20) 年
(佐渡・相川)



1737 (元文2) 年
(紀伊・中島)



1741 (寛保元) 年
(大坂・高津)

十文銭



1708 (宝永5) 年

四文銭



(表)



(裏)

1768 (明和5) 年
(江戸・深川)

天保通宝 (百文銭)



1835 (天保6) 年

江戸時代の地方貨

徳川幕府により貨幣の全国統一が図られ、貨幣の発行権は幕府が握ることとなり、幕府発行の貨幣が唯一通貨として全国に流通しました。ところが例外として、幕府の許可を得て藩内通用という限定のもとに発行された貨幣が地方貨です。



仙台通宝 (鉄)
1784 (天明4) 年



仙台通宝 (銅)
1784 (天明4) 年



箱館通宝 (鉄)
1856 (安政3) 年



秋田 銅山至宝 (当百)
1862 (文久2) 年



秋田鰐銭 (銅)
1863 (文久3) 年



琉球通宝 (当百)
1863 (文久3) 年



琉球通宝 (半朱)
1863 (文久3) 年



筑前一分金
1859 (安政6) 年



盛岡八匁銀判
1868 (慶応4) 年

貨幣司



二分金
量目：3.0 g
品位：金223／1000



一分銀
量目：8.6 g
品位：銀807／1000



一朱銀
量目：1.8 g
品位：銀880／1000

幕府が大政奉還したあと、1868（慶応4）年4月に明治政府は金座、銀座、銭座を接收し、これらを引き継ぐ形で会計官（財務省の前身）中に貨幣を鑄造する機関として「貨幣司」を設置しました。

貨幣司では二分金、一分銀などを鑄造しましたが、1869（明治2）年、太政官に「造幣局」を設置したため貨幣司は廃止となり、金座・銀座の灯りも共に消えることになりました。

江戸時代の財布・天秤など



早道（道中用銭入れ）

道中用の財布で、皮製が多く、袋の部分と差し込み式の筒の部分からなっており、その中央を角帯で挟み、紐を通して腰に下げるので落とす心配がなく、下の袋の部分に小銭を、上の筒には一分銀などの金銀貨幣を入れていました。



緋（さし）銭

緋（銭の孔に通す細い縄）で貫いた銭のことをいい、写真のものは「一貫」と呼ばれる銭千文のもので「一緋」ともいいます。このような緋銭には、100文や500文などもあり、100文の場合、実際96文を一差ししてあれば100文として扱われました。



両替商天秤

両替商が丁銀や豆板銀の重さをはかるために使用していたものです。

新貨条例 ①

明治新政府は、当初、江戸幕府が発行した貨幣、各藩が発行していた藩札などの通用を認める一方、自らも太政官札などの紙幣や、二分金、一分銀などの金銀貨を発行していたことから、様々な通貨が流通していました。戊辰戦争など旧幕府からの転換に伴う社会の混乱が続く中で、新政府や藩などが紙幣を増発したほか、貨幣の偽造が横行するなど、通貨制度は混乱を極めていました。

そうした中で、新政府は、幕末以降の混乱した通貨制度を立て直し、近代的な通貨制度を構築するため、大隈重信（参与）と久世喜弘（造幣局判事）の建議を基に、1871（明治4）年5月に「新貨条例」を制定しました。

これにより、貨幣の単位を「円」とすること、十進法の採用、金本位制の採用（1円の価値は純金1.5グラム）、貨幣の仕様などが定められました。

—新貨条例の下で発行された貨幣—



20円金貨幣

1870（明治3）年
量目：33.3333g
直径：35.0606mm
品位：金900/1000



10円金貨幣

1871（明治4）年
量目：16.6666g
直径：29.424mm
品位：金900/1000



5円金貨幣

1871（明治4）年
量目：8.3333g
直径：23.848mm
品位：金900/1000



2円金貨幣

1870（明治3）年
量目：3.3333g
直径：17.484mm
品位：金900/1000



1円金貨幣

1871（明治4）年
量目：1.6666g
直径：13.515mm
品位：金900/1000



新貨条例 ②



1 円銀貨幣（貿易用）

1870（明治3）年
量目：26.957g
直径：37.575mm
品位：銀900/1000



50 銭銀貨幣

1870（明治3）年
量目：12.5g
直径：31.515mm
品位：銀800/1000



20 銭銀貨幣

1870（明治3）年
量目：5.0g
直径：23.333mm
品位：銀800/1000



10 銭銀貨幣

1870（明治3）年
量目：2.5g
直径：17.575mm
品位：銀800/1000



5 銭銀貨幣

1870（明治3）年
量目：1.25g
直径：15.151mm
品位：銀800/1000



1 銭銅貨幣

1873（明治6）年
量目：7.128g
直径：27.878mm
品位：銅980/1000



半銭銅貨幣

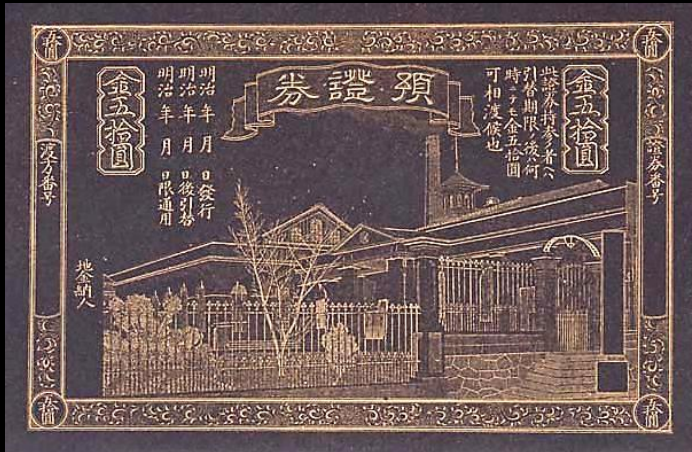
1873（明治6）年
量目：3.564g
直径：21.818mm
品位：銅980/1000



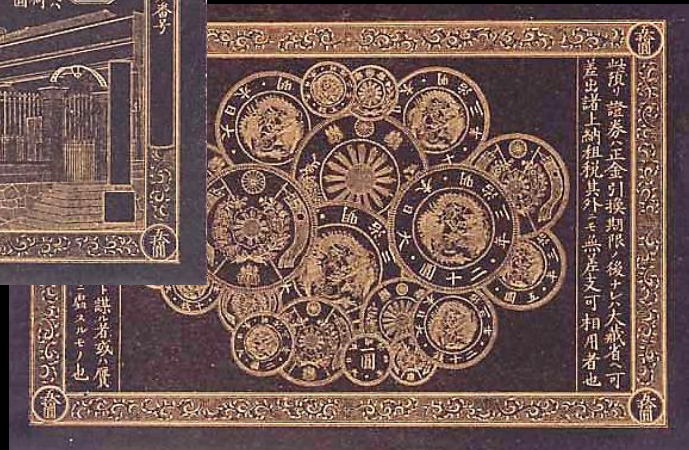
1 厘銅貨幣

1873（明治6）年
量目：0.9072g
直径：15.757mm
品位：銅980/1000

古金銀預り証券



古金銀預り証券下刷（50円）



古金銀預り証券印刷原版（銅製）（50円）

明治新政府は新貨を速やかに全国に流通させ、同時に旧金銀貨幣を早急に回収するため、その集中策として1871（明治4）年12月、古金銀預り証券発行規例を布告しました。

この制度は、徳川時代の金銀貨幣や金銀地金の輸納者に対し、その価格に応じ4種類（50円・20円・10円・5円）の預り証券を渡し、一定期限後に正金（新貨幣）と引き換えるものですが、証券所有者は通用期限内であればこの証券を納税その他に使用することもできる一種の兌換券でした。

この証券は、大阪の出納寮で取扱いをしていましたが、1872（明治5）年5月からは造幣局で取り扱うことになり、1年後の1873（明治6）年5月に廃止されました。

「貨幣法」制定 1897（明治30）年

新貨条例制定以来、わが国は金本位制を採用しましたが、東洋市場での交易のため、本位銀貨幣（1円銀貨幣）を発行し、事実上は金銀複本位制下にありました。しかし、日清戦争の勝利で巨額の賠償金をイギリスのポンド金貨幣で受領したことにより、世界の大勢であった金本位制の本格的な採用に向け、1897（明治30）年3月、「貨幣法」が制定され、ここに名実ともに「金本位制」の貨幣制度が確立しました。



20円金貨幣

1897（明治30）年
量目：16.6665g
直径：28.7878mm
品位：金900/1000



10円金貨幣

1897（明治30）年
量目：8.3333g
直径：21.212mm
品位：金900/1000



5円金貨幣

1897（明治30）年
量目：4.1666g
直径：16.969mm
品位：金900/1000



50銭銀貨幣

1897（明治30）年
量目：13.4783g
直径：30.909mm
品位：銀800/1000



20銭銀貨幣

1897（明治30）年
量目：5.3914g
直径：22.424mm
品位：銀800/1000



10銭銀貨幣

1897（明治30）年
量目：2.6955g
直径：17.575mm
品位：銀800/1000



5銭白銅貨幣

1897（明治30）年
量目：4.6654g
直径：20.606mm
品位：銅750/1000



1銭青銅貨幣

1898（明治31）年
量目：7.128g
直径：27.878mm
品位：銅950/1000

金本位制最後の金貨幣

第一次大戦中の1917（大正6）年、わが国は各国に続いて金輸出を禁止して金本位制を停止すると、その後に金貨幣の製造も休止しました。

1930（昭和5）年1月に金輸出解禁が断行されたことにより、金貨幣の製造も再開されましたが、翌年12月に金輸出の再禁止が実施されると、金貨幣の製造も1932（昭和7）年1月に再び休止しました。

以後、1986（昭和61）年の天皇陛下御在位60年記念10万円金貨幣まで、わが国においては半世紀以上にわたり金貨幣が発行されることがありませんでした。



20円金貨幣

量目：16.6665g
直径：28.7878mm
品位：金900/1000



1930（昭和5）年



1931（昭和6）年



1932（昭和7）年



5円金貨幣

1930（昭和5）年
量目：4.1666g
直径：16.969mm
品位：金900/1000

金貨幣の製造が再開された間、昭和5年銘、6年銘、7年銘の20円金貨幣及び昭和5年銘の5円金貨幣が製造されましたが、これらのほとんどは海外に流出して鋳潰されたため、現存数は非常に限られています。

「臨時通貨法」制定

1937（昭和12）年に日中戦争が勃発すると、補助貨幣の需要増加への対応や軍需用金属の需給調整のため、従来の貨幣法による補助貨幣制度を臨時に改める必要性が生じました。このため、翌1938（昭和13）年に、発行期限を「日中戦争終了後1年」とした「臨時通貨法」が制定されましたが、その後「太平洋戦争終結後1年」に改正され、戦後には有効期限の規定が削られました。その結果、1988（昭和63）年に「通貨の単位及び貨幣の発行等に関する法律」が施行されるまで、わが国の補助貨幣の根拠法として存続することになりました。

—「臨時通貨法」の下で発行された戦時貨幣—



10 銭アルミ青銅貨幣

1938（昭和13）年
量目：4.0 g
直径：22.0 mm
品位：銅95%、
アルミニウム5%



5 銭アルミ青銅貨幣

1938（昭和13）年
量目：2.8 g
直径：19.0 mm
品位：銅95%、
アルミニウム5%



1 銭黄銅貨幣

1938（昭和13）年
量目：3.75 g
直径：23.03 mm
品位：銅90%、亜鉛10%



1 銭アルミニウム貨幣

1938（昭和13）年
量目：0.9 g
直径：17.5 mm
品位：純アルミニウム

幻の貨幣（未発行貨幣）

製造されたものの、世に出回ることのなかった幻の貨幣です。

●50銭銀貨幣（1918（大正7）年）

材料である銀が高騰し、鑄潰される恐れが出たため、発行されなかった銀貨幣です。
図案が初めて一般公募された貨幣で、八咫鳥が描かれていたので、別名「八咫鳥銀貨」と呼ばれています。



量目：6.75 g
直径：24.848 mm
品位：銀80%、銅20%

●陶貨幣（1945（昭和20）年）

戦況の悪化によって金属材料が窮迫したため、粘土と長石を主原料とした陶貨幣の製造を京都市（京都府）、有田町（佐賀県）、瀬戸市（愛知県）の3か所で開始しましたが、製造予定枚数に達する前に戦争が終わったため発行されなかった貨幣です。



直径：21.9 mm
品位：長石10～15%
砥粉85～90%



直径：18.0 mm
品位：大学粘土90%
褐鉄鉱10%



直径：15.0 mm
品位：三間板粘土60% 泉山石15%
赤目粘土15% その他10%

●10円洋銀貨幣（1950年（昭和25）年）

材料の一部を占めるニッケルが、朝鮮戦争の勃発により軍需資材として使用を制限されることになったため、製造が中止され、製造済のものも発行されることなく鑄潰された貨幣です。



量目：2.75 g
直径：20.0 mm
品位：ニッケル16～18%、
銅55～60%、
亜鉛22～29%

記念貨幣 ①

1964（昭和39）年に開催されたオリンピック東京大会を記念して発行された1000円銀貨幣と100円銀貨幣が、わが国で最初の記念貨幣です。

以後、国民がこぞってお祝いするような事柄（皇室の御慶事、国家的事業の完成等）や国際的な行事（オリンピック、万国博覧会等）などには記念貨幣の発行が欠かせないものとなっています。記念貨幣の一部を紹介します。

わが国初の記念貨幣



東京オリンピック記念1000円銀貨幣

1964（昭和39）年
量目：20.0 g
直径：35.0 mm
品位：銀92.5%、銅7.5%

図柄は一般公募によるもの



東京オリンピック記念100円銀貨幣

1964（昭和39）年
量目：4.8 g
直径：22.6 mm
品位：銀60%、銅30%、亜鉛10%



日本万国博覧会記念100円白銅貨幣

1970（昭和45）年
量目：9.0 g
直径：28.0 mm
品位：銅75%、ニッケル25%



札幌オリンピック記念100円白銅貨幣

1972（昭和47）年
量目：12.0 g
直径：30.0 mm
品位：銅75%、ニッケル25%

半世紀以上振りに発行された金貨幣



天皇陛下御在位60年記念10万円金貨幣

1986（昭和61）年
量目：20.0 g
直径：30.0 mm
品位：純金



青函トンネル開通記念500円白銅貨幣

1988（昭和63）年
量目：13.0 g
直径：30.0 mm
品位：銅75%、ニッケル25%

記念貨幣 ②

わが国初のカラーコインは、2003（平成15）年2月に青森県で開催された第5回アジア冬季競技大会を記念した1000円銀貨幣で、りんごを中心に鮮やかな色彩で描かれています。

また、2008（平成20）年12月には、地方自治法施行60周年を記念したわが国初のバイカラー・クラッド貨幣が発行されました。

バイカラー・クラッド技術は、異なる種類の金属板をサンドイッチ状に挟み込む「クラッド」技術でできた円板を、それとは異なる金属でできたリングの中にはめ合わせる「バイカラー」技術を組み合わせたものです。2021（令和3）年11月1日より発行が開始された現行500円貨幣にも採用されています。

わが国初のカラーコイン



第5回アジア冬季競技大会記念1000円銀貨幣

2003（平成15）年

量目：31.1 g

直径：40.0 mm

品位：純銀

わが国初のバイカラー・クラッド貨幣



地方自治法施行60周年記念
500円バイカラー・クラッド貨幣（北海道）

2008（平成20）年

量目：7.1 g

直径：26.5 mm

品位：銅75%、亜鉛12.5%、
ニッケル12.5%



地方自治法施行60周年記念1000円銀貨幣
（広島県・埼玉県・大阪府・共通裏面）

2013（平成25）年

2014（平成26年）

2015（平成27年）

量目：31.1 g

直径：40.0 mm

品位：純銀

記念貨幣 ③

わが国の貨幣に初めて虹色発色加工技術が採用されたのは、2012（平成24）年に東京で開催された「第67回国際通貨基金・世界銀行グループ年次総会」を記念して発行された1000円銀貨幣です。この記念貨幣の表面には、葛飾北斎の「山下白雨」（富嶽三十六景）から、日本を代表する富士山と、歌川広重の「日本橋・朝之景」（東海道五十三次）から、躍動感のある江戸の庶民が、虹色発色加工技術を用いて美しくデザインされています。

虹色発色加工技術とは、微細な間隔に刻んだ溝に当たり反射した光が干渉し、虹色に輝いて見えるように加工する技術です。

わが国初の虹色発色加工技術
を採用した記念貨幣



第67回国際通貨基金・世界銀行グループ
年次総会記念1000円貨幣
2012（平成24）年

量目：31.1 g
直径：40.0 mm
品位：銀92.5%、銅7.5%

新幹線鉄道開業50周年記念1000円銀貨幣
2014（平成26）年

量目：31.1 g
直径：40.0 mm
品位：純銀

わが国で初めて貨幣の両面に
虹色発色加工を採用

わが国で初めて金貨幣に虹色
発色加工を採用



TM© Rugby World Cup Limited 1986.

ラグビーワールドカップ2019™日本大会
記念10000円金貨幣
2019（平成31）年

量目：15.6 g
直径：26.0 mm
品位：純金



TM© Rugby World Cup Limited 2015.

ラグビーワールドカップ2019™日本大会
記念1000円銀貨幣
2019（平成31）年

量目：31.1 g
直径：40.0 mm
品位：純銀

造幣局が製造した外国貨幣

造幣局が戦後に製造した外国貨幣の一部を紹介します。

通常貨幣



バングラデシュ 2タカ貨幣
2013（平成25）年
量目：5.5 g
直径：24.0 mm
素材：ステンレススチール



ジョージア 20テトリ貨幣
2016（平成28）年
量目：5.0 g
直径：25.0 mm
素材：ステンレススチール

記念貨幣



ニュージーランド
「アオラキ／マウント・クック」
1ニュージーランド・ドル記念銀貨幣
2007（平成19）年
量目：31.1 g
直径：40.0 mm
品位：純銀



スリランカ
「日本スリランカ国交樹立60周年」
記念1,000ルピー銀貨幣
2012（平成24）年
量目：20.0 g
直径：35.0 mm
品位：銀92.5%、銅7.5%



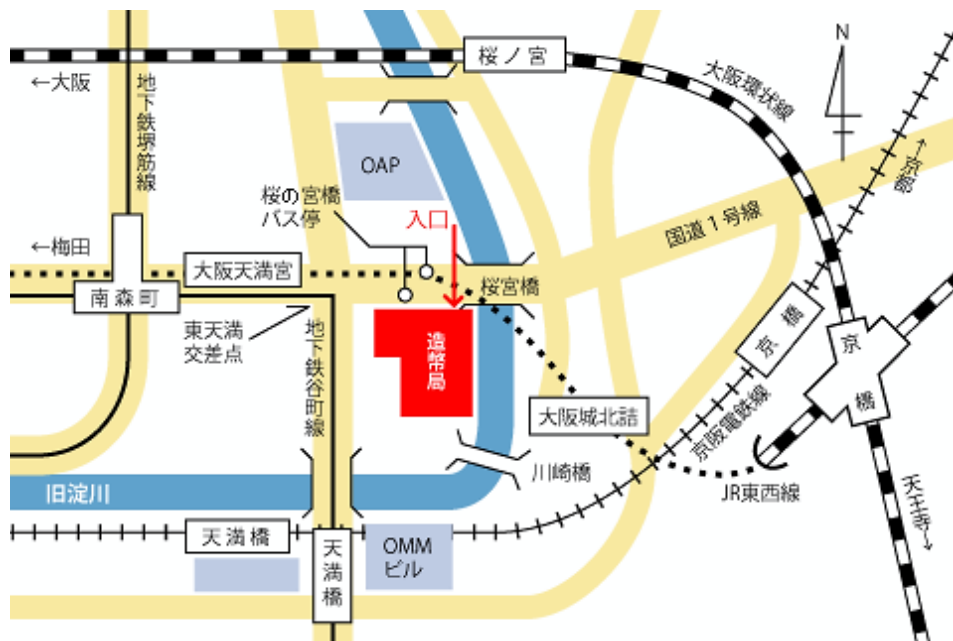
ブルネイ
「日本ブルネイ外交関係樹立30周年」
記念30ドル銀貨幣
2014（平成26）年
量目：31.1 g
直径：40.0 mm
品位：純銀



オマーン
「ニズワ・イスラム文化の首都2015」
記念1リアル銀貨幣
2015（平成27）年
量目：28.28 g
直径：38.61 mm
品位：純銀

来館のご案内

- 入館料 : 無料
- 開館時間 : 9時～16時45分 (入館は16時まで)
- 休館日 : 毎週水曜日、年末年始、桜の通り抜け期間 など
- その他 : 10名様以上の団体での見学を希望される場合は、事前にお電話にてご予約をお願いいたします。
ご入館は、造幣局正門よりお入りください。
- 住所 : 大阪市北区天満1-1-79 造幣局構内
- 電話番号 : 06-6351-8509 (造幣博物館直通)



- JR環状線 桜ノ宮駅から徒歩約15分
- JR東西線 大阪天満宮駅から徒歩約15分
- 大阪メトロ 堺筋線・谷町線南森町駅から徒歩約15分
- 大阪メトロ 谷町線天満橋駅から徒歩約15分
- 京阪電鉄 天満橋駅から徒歩約15分

造幣博物館のご案内

2025 (令和7) 年4月
独立行政法人造幣局

ご注意事項

この「造幣博物館のご案内」は、著作権の対象となっています。著作権は日本国著作権法及び国際条約により保護されています。

「造幣博物館のご案内」の商用目的での転載・複製は、固く禁じます。



造幣博物館のご案内

独立行政法人造幣局
Japan Mint